写真２　１区断面（東から）

写真３　６区断面　外堀底面検出状況（東から）

写真４　３区・４区　近代石組溝検出状況（北から）

写真５　８区断面　外堀底面検出状況（東から）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひめじじょうじょうかまちあと
書名	姫路城城下町跡
副書名	姫路城跡第348次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	姫路市埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第41集
編著者名	小柴　治子
編著機関	姫路市埋蔵文化財センター
所在地	〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1　TEL（079）252-3950
発行年月日	2016年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひめじじょうじょうかまちあと 姫路城城下町跡	ひょうごけんひめじし 兵庫県姫路市 ひがしえきまえちょうばんほか 東駅前町8番1他	28201	020169	34度 49分 40秒	134度 41分 37秒	2015.12.8 ～ 2015.12.10	23.32㎡	店舗建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	調査番号
姫路城城下町跡	集落跡	江戸時代	外堀	陶磁器	20150390

1　本書は、姫路市東駅前町8番1他に所在する姫路城城下町跡（遺跡番号：020169）の発掘調査報告書である。
2　本発掘調査（調査番号：20150390）は、姫路市教育委員会が実施し、姫路市埋蔵文化財センター小柴治子が担当した。
3　発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海水準（T.P）を基準とした。
4　土層名は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版　標準土色帖』（1999年度版）に準拠した。
5　整理作業は、平成27年度に姫路市埋蔵文化財センターにて実施し、報告書の作成は小柴が担当した。
6　本報告書に関わる遺物・写真・図面等は姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告　第41集
姫路城城下町跡-姫路城跡第348次発掘調査報告書-

編　集　姫路市埋蔵文化財センター
〒671-0246　兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1
発　行　姫路市教育委員会
〒670-8501　兵庫県姫路市安田四丁目1番地
発行日　平成28年（2016年）3月31日
印　刷　富士高速印刷株式会社
〒679-4232　兵庫県姫路市林田町上伊勢962番地の3

姫路城城下町跡

―姫路城跡第348次発掘調査報告書―

調査地遠景（南東から）

２０１６

姫路市教育委員会

1．調査に至る経緯と調査の位置

姫路市東駅前町８番１他において、店舗の建設工事が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である姫路城城下町跡のうち、外曲輪の南部土塁および外堀にあたり（図1）、埋設構造物を撤去する際の立会調査において外堀埋土を確認し、隣接する市道（内々環状東線）の歩道拡幅工事に伴う既往調査でも遺構を検出している（図 2）。このため、事業者と委託契約を締結し、遺構に影響を及ぼす範囲を対象に本発掘調査を実施することとなった。

調査対象は基礎掘削範囲９ヶ所であり、調査面積は23.32 ㎡である（図3）。

2．調査の成果

既存構造物による撹乱が比較的多く、現地表面から約 0.7～ 1.1mの盛土を掘り下げた標高 10.4～ 11.2m付近で遺構を検出した。調査地北側の１区では、幅 0.45mの東西方向の溝状の落ちを確認した。しかし、調査範囲が狭小であり遺物も出土しなかったため、遺構であるか判別し難い。1 区東側に設定した 2 区では現地表面から 1.3mまで撹乱が及んでおり、その直下の標高 10.4mで地山とみられる灰黄色円礫混じりシルト層を確認した。遺構は検出できなかった。

調査地中央付近に設定した３・４区では、東西方向の間知石組み及びその裏込めと考えられる河原石混じりの土層を検出した。この石組は３区では大半がコンクリート構造物に覆われ、平面での検出のみにとどまったが、４区では、断面観察により３石分を確認し、さらに下方に続いていることが判明した。５区は撹乱土下層で外堀埋土とみられる土層を確認し、北側壁面では３・４区から続く間知石組みの石材を検出した。

調査地の南側に設定した６～９区では、盛土下層で外堀の埋土とみられる暗青灰色粘質土層（図４　断面図 11・12 層）を確認した。可能な限り堀底の検出に努め、6・7 区では現地表面から 2.8m、8 区では 2.1mで堀底とみられる砂層を確認した。外堀埋土からは、染付磁器（皿）、陶器（コンロ）、瓦などが出土した（写真１）。

3．まとめ

本調査では、1・2 区で灰黄色砂礫混じりの地山、3～５区において間知石組みとその下層の外堀埋土、6～９区において外堀埋土と堀底を検出した。このうち、3～５区の間知石組みは、平成 25 年度、26 年度に実施した市道（内々環状東線）の歩道拡幅工事に伴う姫路城跡第 303 次、315 次発掘調査において検出した､外堀埋土上に築かれた近代石組み溝の南側壁にあたると考えられる。今回は､北側壁は検出されなかったが、既往調査では､溝は上幅が 2.4m､深さが最大で 1.6mの規模であること､外堀の北岸ラインと石組み溝の北壁がほぼ同じか若干南であったこと、出土遺物から昭和初期には廃絶したことが判明している。これらの調査成果を総合すれば､1･2 区と３～５区の間に外堀の北岸が位置しており、1・2 区は南部土塁の範囲内に位置する可能性が高い。

また､『姫路城郭総堀管尺大間数図』に記載されている当該地付近での外堀の幅は、7 間 5 尺（14.24m）であるが、第 315 次調査では外堀北岸からこの距離を超える位置でも南岸が検出されず、記載内容より幅が広いとの結果が報告されている。今回も調査地南端に設定した８区では、6・7 区と比べて堀底が高くなっているものの、外堀の南岸は検出されず、既往調査成果との矛盾はなかった。

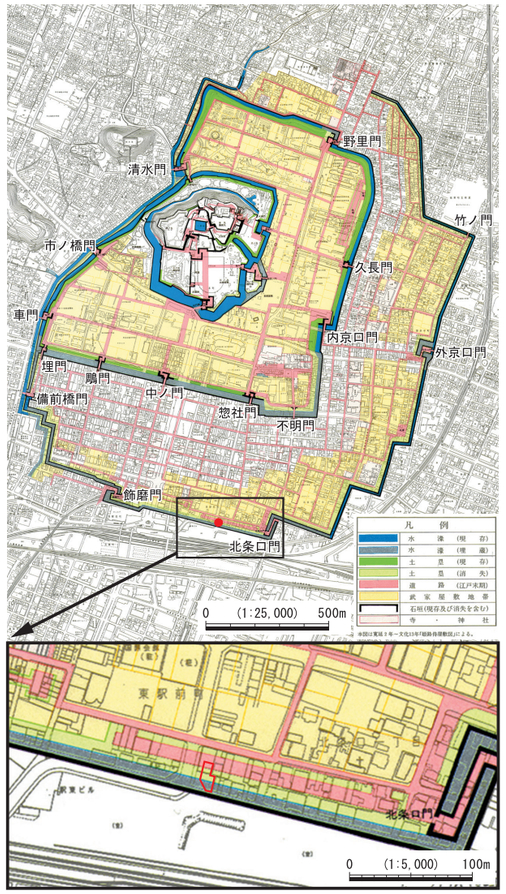

図１　調査位置図

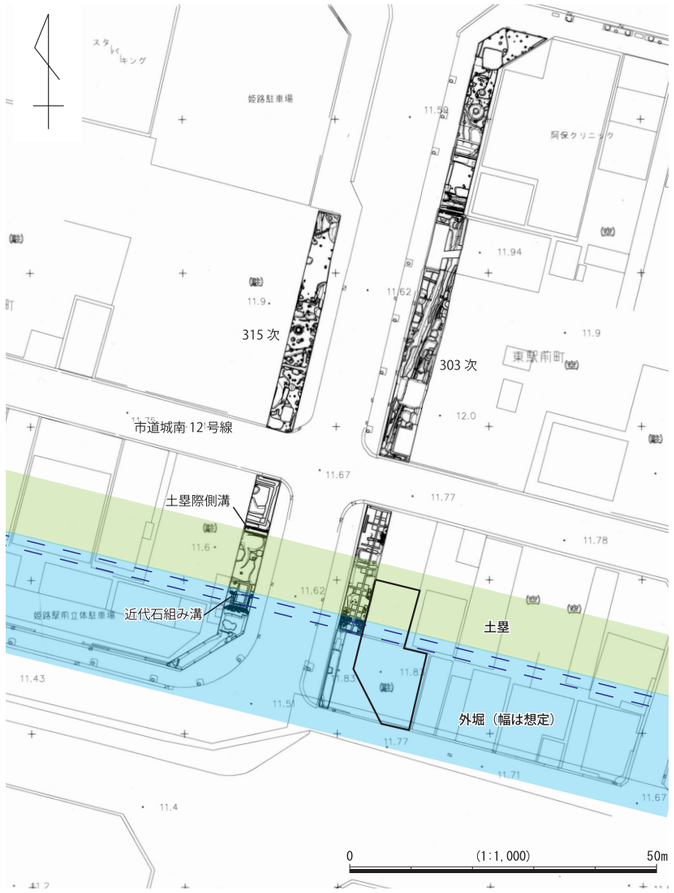

図２　調査区配置図（303 次、315 次との合成図）

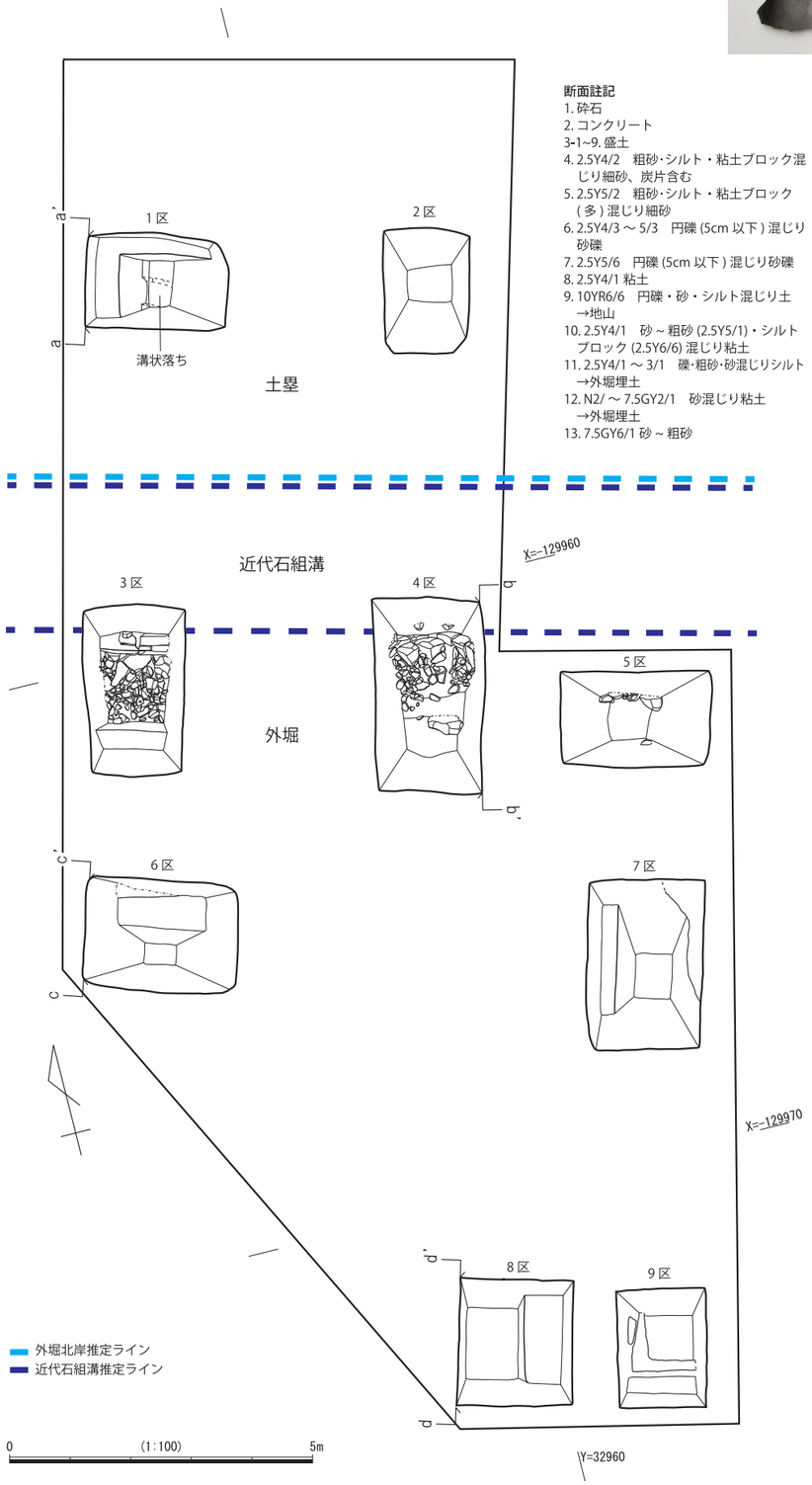

図３　調査区平面図

断面註記

1. 砕石
2. コンクリート
3-1~9. 盛土
4. 2.5Y4/2　粗砂･シルト・粘土ブロック混じり細砂、炭片含む
5. 2.5Y5/2　粗砂･シルト・粘土ブロック（多）混じり細砂
6. 2.5Y4/3 ～ 5/3　円礫 (5cm 以下) 混じり砂礫
7. 2.5Y5/6　円礫 (5cm 以下) 混じり砂礫
8. 2.5Y4/1 粘土
9. 10YR6/6　円礫・砂・シルト混じり土 →地山
10. 2.5Y4/1　砂 ~ 粗砂 (2.5Y5/1)・シルトブロック (2.5Y6/6) 混じり粘土
11. 2.5Y4/1 ～ 3/1　礫･粗砂･砂混じりシルト →外堀埋土
12. N2/ ～ 7.5GY2/1　砂混じり粘土 →外堀埋土
13. 7.5GY6/1 砂 ~ 粗砂

写真１　外堀　出土遺物

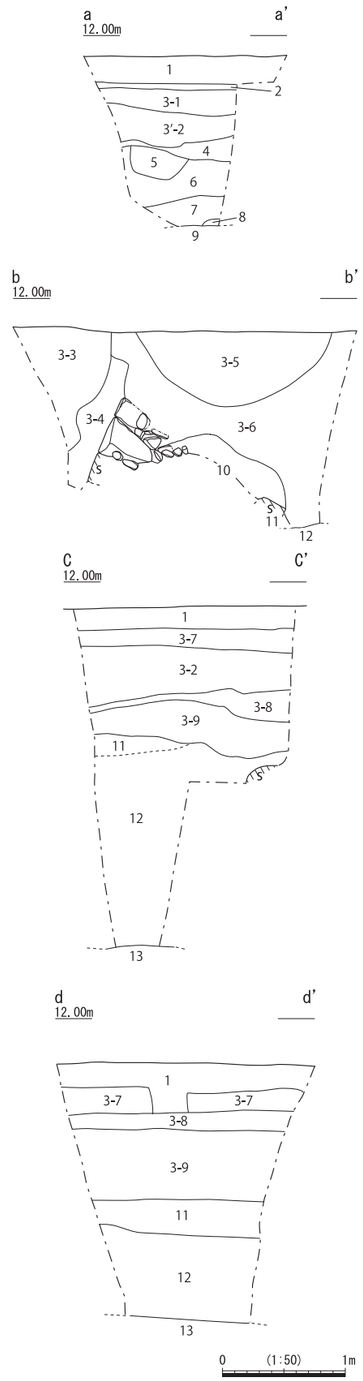

図４　調査区断面図